
音威子府村 外部人材伴走型インターンプログラム実践報告

株式会社AsetZ
執行役員COO 白井達也

目次

01

音威子府村における取り組みのビジョン・目的

02

都市圏学生交流推進事業(2021-2023)振り返り

03

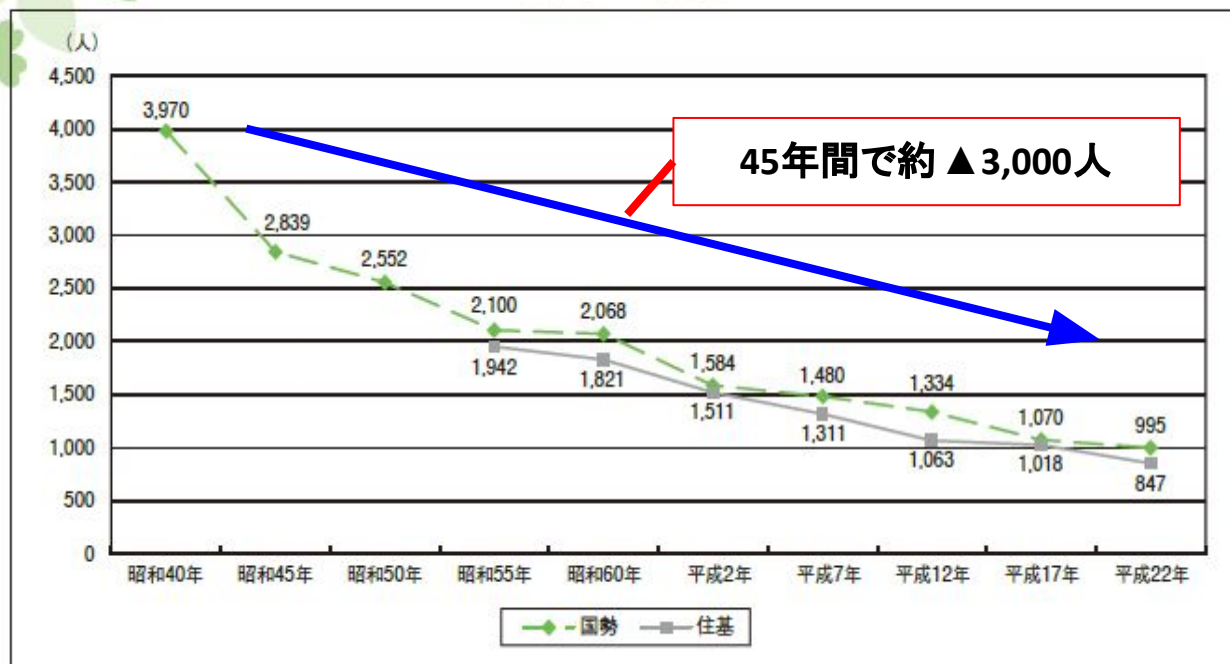
第1期 外部人材伴走型インターンプログラム振り返り

音威子府村における取り組みの ビジョン・目的

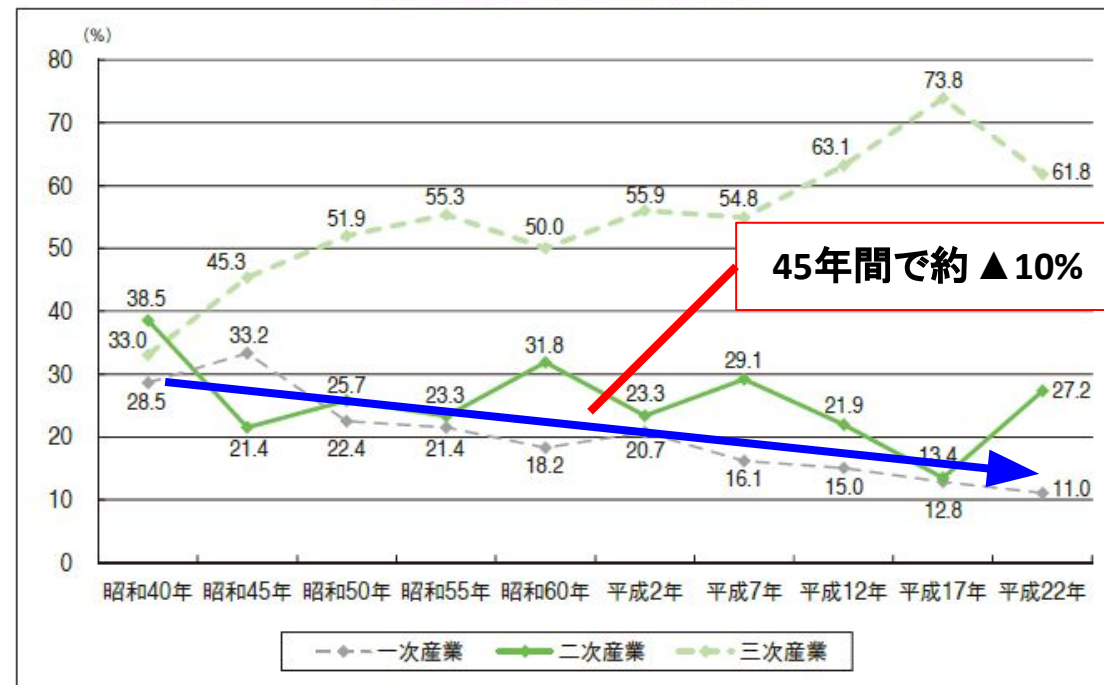
いま行動すべき理由と、外部協働の必要性

本村においては、人口減少に伴う過疎化や少子高齢化が顕著であり、主要産業である農業を初めとする一次産業においても多大な影響が出ていることから、定住や移住促進を含む具体的な対策が必要と認識している。村の活性化に向けては外部との協働が有効、かつ必要と考えている

●人口の推移



●産業別就業人口の構成比

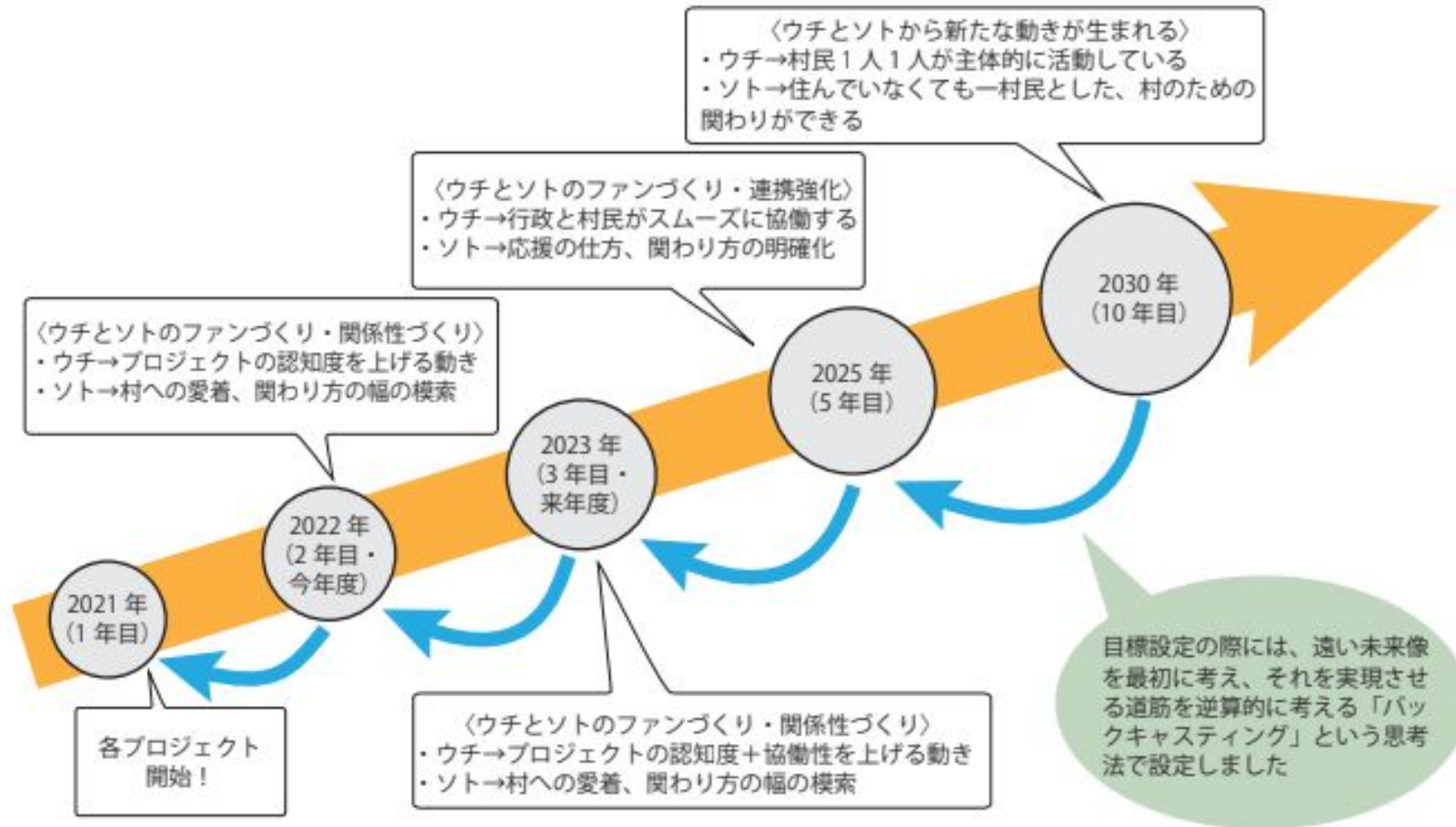


音威子府村が目指す姿

数十年後も活気のある(挑戦ができる)状態で
音威子府村を存続させること

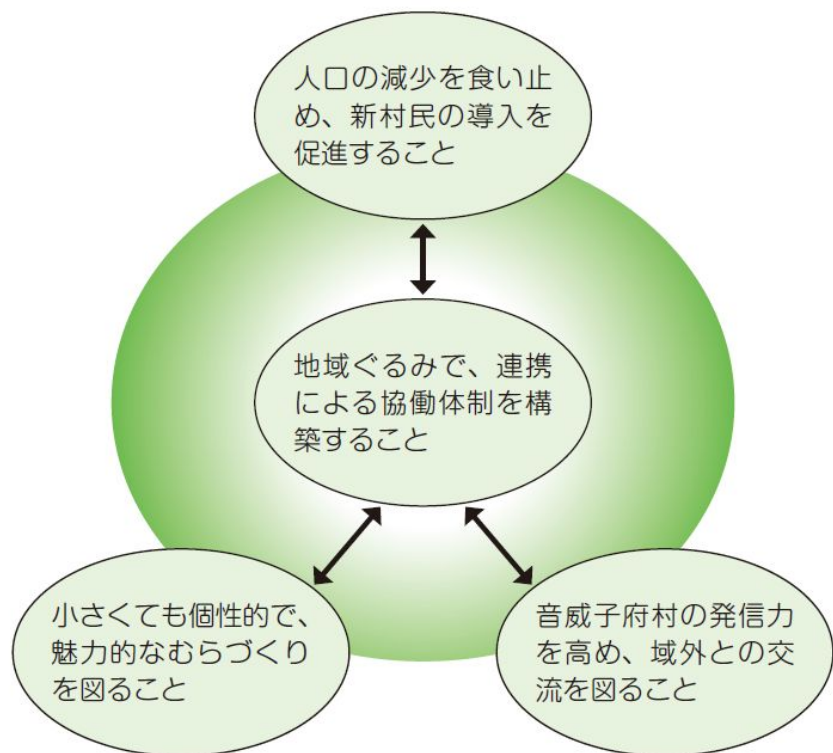
事業の中長期目標

バックキャスティング思考を採用し、2030年における状態目標を『「ウチ」と「ソト」から新たな動きが生まれること』として設定した



事業実施の背景と基本課題

村の基幹産業である農業を活かしつつ **外部から新たな刺激を取り入れる** ことで、村民一人ひとりが村の将来を主体的に考え、行動を起こすきっかけを作ることを目指し、基本課題に対する取り組みを検討・実施してきている



【基本課題に対応した検討すべき視点】

①人口の減少を食い止め、新住民の導入を促進すること

- 村民の福祉を高め、誰もが生涯安心して暮らせるむらづくりを推進すること。
- 音威子府村の環境を求めてくる新しい村民の受け入れ環境を整えること。

②小さくても個性的で、魅力的なむらづくりを図ること

- 高校の立地を活かした“匠のむら”として、魅力ある環境を創ること。
- 音威子府方式ともいうべき自然環境との共生や、地域間・産業間を結び付けていく“循環・連携型”システムづくりを進めること。

③音威子府村の発信力を高め、域外との交流を図ること

- 音威子府村の環境(資質)を活かした観光・交流の展開を図ること。
- 音威子府ブランドの形成を図ること。

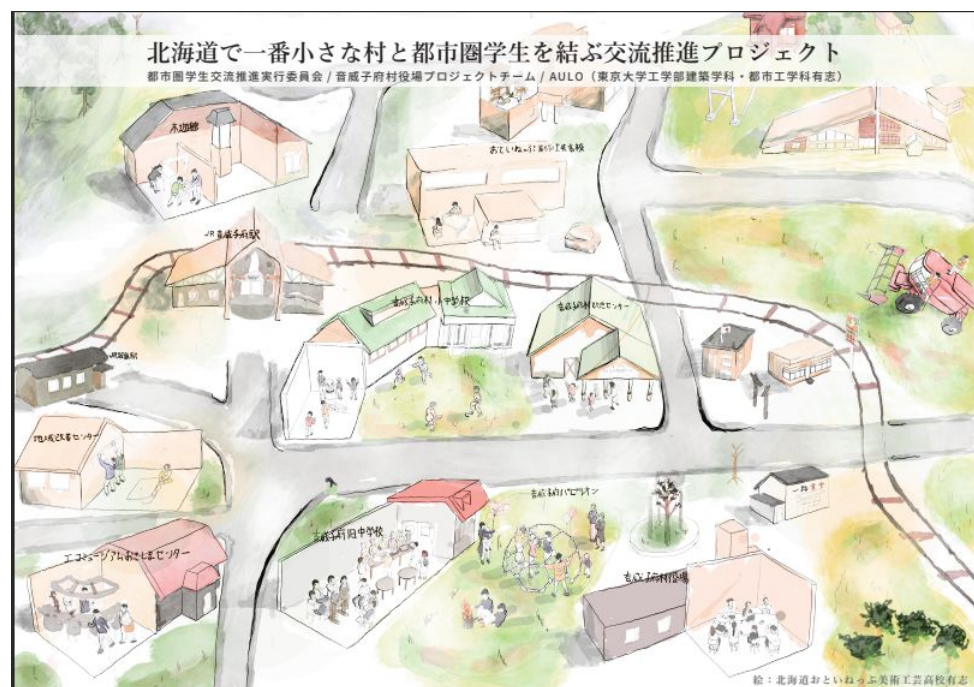
④地域ぐるみで、連携による協働体制を構築すること

- 村民の自治力を高め、共助による支え合いを推進すること。
- 村民・行政・教育機関・企業等の協働体制を強化すること。

都市圏学生交流推進事業（2021-2023）振り返り

都市圏学生との交流を通して、村民の“当事者意識醸成”を模索

役場職員がプロジェクトチームを結成し、専門的な知識や経験を持つ都市圏学生と共同でプロジェクトを立ち上げた。関与者の相互交流を通して、将来の村づくりへと繋がる機運、きっかけづくりを企図した。既存のコミュニティを維持しつつも、新たな関係性を創出し、村全体の活性化に資するものとして「ソト」の再定義も目指した。



「事業実施前」の状況・課題(Before)

本事業実施前の状況・課題をもとに5項目の評価軸を設定。まず足元はこれらの課題解決を目的とし、本事業を推進した。

評価観点

本事業実施前の状況・課題

都市圏学生と村民との 交流の場の創出

- 「ソト」との交流の場が少なく、どのような交流の場が作れるのかアイデアがなかった
- 交流を円滑に進めるための組織体制や、サポート体制の構築がされていなかった

地域特色の 活用と保護

- 特有の資産や、利活用可能性のある資産は多くあったものの、有効に活用されていなかった
- 地域特有の資源や文化が「当たり前」のものとして捉えられていた

地域コミュニティの 強化

- 地元住民の間でコミュニティ活動への関心が低下しており、積極的な参加を促すための戦略が必要であった
- 活動を支えるための財政的、人的な資源が不足していた

おと高生との 連携

- 村としての重要な資産として認識はされていたが、長期的な関与を促進するための動機づけとサポートが不足していた

村役場内の 連携強化

- 異なる部署・組織間での情報共有や協力体制が整備されていなかった
- 村役場内での政策や、プロジェクト目標の整合性を確保するための組織内調整に課題があった

評価概要 (After)

本事業の当初目的は概ね達成。一方で、まちづくりへの村民個人々の主体的な取り組み姿勢・意識醸成にはまだ発展の余地が残った。

都市圏学生交流推進事業

地域の特色を活かして、村民と都市の若者が共同でまちづくりを展開することにより、村民一人ひとりが主体的にまちづくりに携わる意識を高め、地域活性化を実現していくことを目的とする事業

農業まちづくり企画

- コロナ禍に伴うオンライン受入れ
- 箆島地区を拠点とした遊休公共施設の活用
- 旧・音威子府中学校校舎におけるワーケーション空間利活用
- 行政若手職員挙手制によるプロジェクトチームの組成

パビリオン制作(多世代交流)

- 学生の専攻を活かした交流事業
 - オンラインでの交流
 - 「OTOINEPPU Pavilion2021」の開催

評価観点

都市圏学生と村民との 交流の場の創出



- オンライン・オフラインの両軸で様々な交流の場を創出

地域特色の 活用と保護



- 遊休施設の保護・利活用で活動拠点を作った
- 他の資産の洗い出し、活用可能性が課題

地域コミュニティの強化



- 関与と事業者に限らず、子ども達との交流も実施
- 他地域への展開、関与者以外への周知、巻き込みが課題

おと高生との
連携



- (本企画では連携は前提とはしていなかったため評価せず)

村役場内の
連携強化



- 挙手制での若手職員の参画
- プロジェクトチームからの発信が主で相互性が薄かった



- 単発のイベントで終わらず、その後のアフターイベントも含めて多くの交流を創出
- パブリックスペース利活用事例コンペティション『ソノバ・アワード2021』に応募し、最終審査の結果『部門賞』を初受賞



- 学生の専攻分野を活かし、屋外で何人かが入れるパビリオンを村民と共に作成
- より多く、より幅広い巻き込みが課題



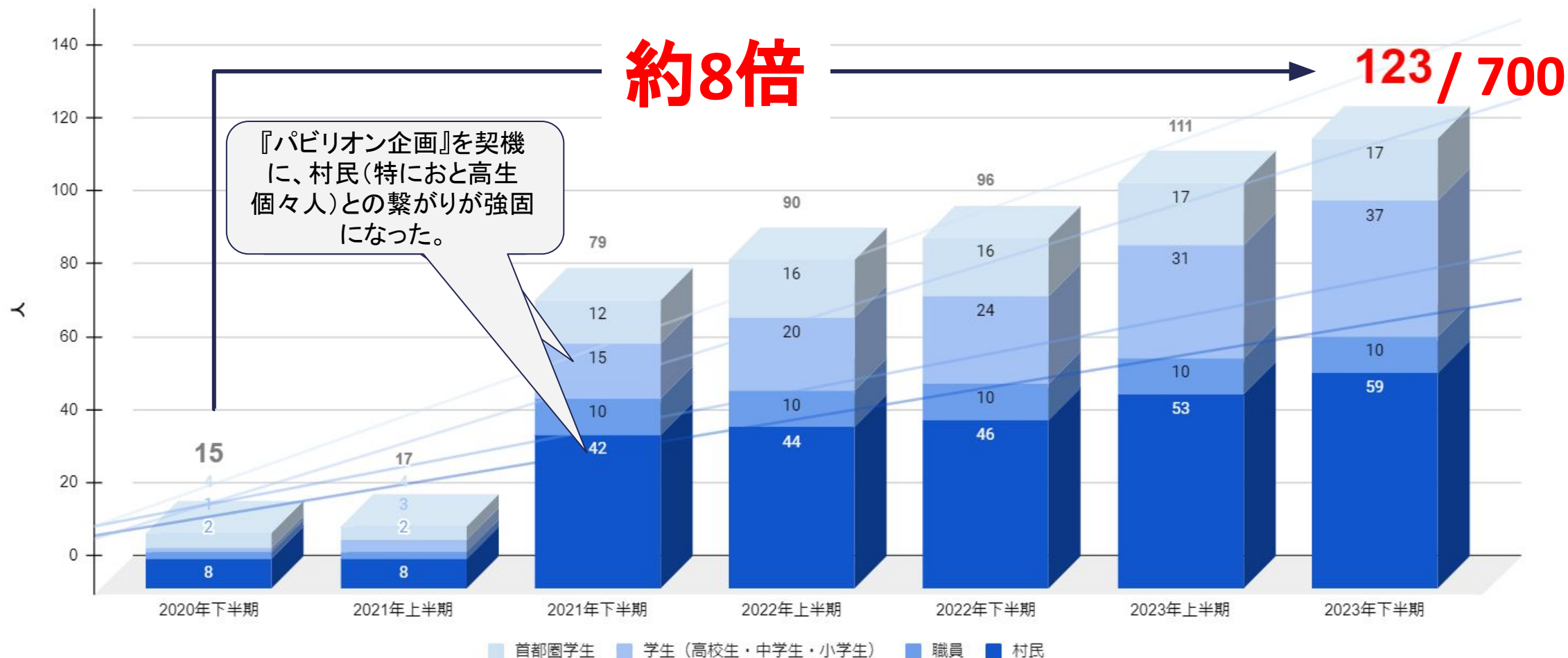
- 都市圏学生とおと高生双方の強みが活かされた
- 音威子府村独自の「強み・資産」としておと高生個々人の重要さを改めて認識できた



- 1年目の発信・周知を経て能動的な参加も生まれた

本事業からの波及効果も含めて継続関与者数が増加

指標として置いた”継続関与者数”が増加し、『ウチ』と『ソト』のファンづくり、関係性作りが進展したといえる



外部評価も獲得 – ソトノバ・アワード2021で『部門賞』を受賞–

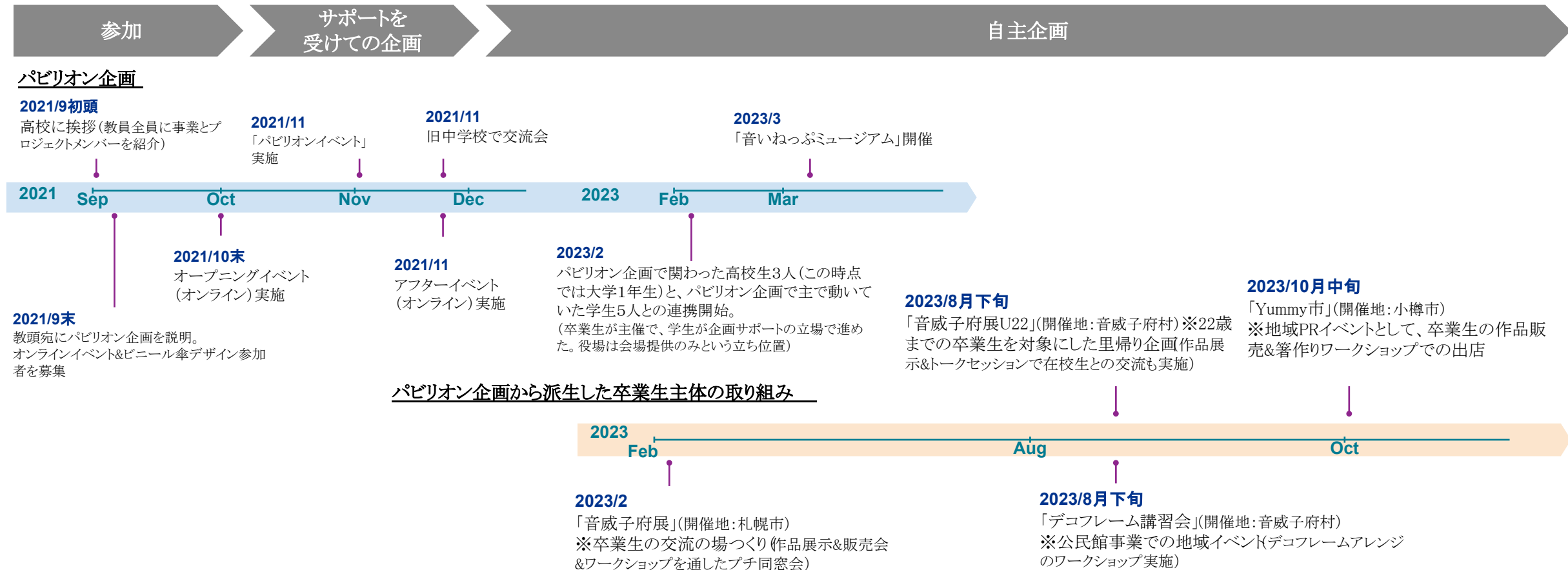
パビリオン企画ではパブリックスペース利活用事例コンペティション『ソトノバ・アワード2021』で『部門賞』を初受賞。



出所: <https://e-kensin.net/news/147023.html>、<https://www.vill.otoineppu.hokkaido.jp/kakuka/chiikishinkou/oshirase/sotonoba.html>

おと高生との連携、卒業生の主体的な関わりの重要性を再認識

事業推進において当初は主目的としていなかったが、「おと高」との連携は不可欠であった。在校生に加えて卒業生とも積極的に関わりを持つていくことで「おと高生」という一括りでの関わり合いではなく、個々人の名前と顔が一致する状態での関わりを実現できた。それにより、「知見や経験を村へ還元する想い」も強化でき、卒業生による自主的な展示「音いねっふミュージアム」の企画・開催にも至った。



前事業評価総括

- 本事業を軸に継続関与者数(*)が増加し、内外からの評価も得られ、本事業は関与者(都市圏学生、村民、自治体)それぞれの主体性を醸成・刺激するための施策として一定の成果が認められた

(*)…定義:村として協力要請をする際に、連絡を取りやすく、且つ能動的・主体的に協力を得られる関与者の数

- 音威子府村が持つ資産を活かして同様の取り組みを継続することで、更なる主体性の向上、地域活性化が見込まれる

- 定量面評価:

波及効果も含め継続関与者数が **123人へ増加**し、村として協力を得られやすい環境の土台を構築できた

× 当初の「定量目標」の設定が無く、評価が難しいのが実態

○ 一方、把握できている範囲の関与者に鑑みると、継続関与者数及び本事業から波及した関与者数が増加

- 今後の取り組みにおいては、より定量的な評価軸を設定する必要がある

例) 地域に対する認知度や、取り組みやイベントに対する満足度など

- 定性面評価:

関与者それぞれの主体性が向上するとともに、**パビリオンは外部評価を得て賞も受賞することができた**

○ 関与者に大きく2つ(想い・行動)の変化が起き、村への関わり方がより主体性を増した

○ 『ソトノバ・アワード2021』ではパビリオン企画が『部門賞』を初受賞

○ 主目的では無かったが「おと高生」個々人との関わりも深まり、卒業生の自主展示企画開催にも波及

- 「おと高」が、村として“最も重要な資産”であることの再認識にも繋がった

○ 将来の村を盛り上げる・活気づける役割を担っていく村の若手職員が、挙手制で組織を組成し事業を牽引した

事業を通じた成果と気づき

学生との本気のまちづくりで、
活気のある(挑戦できる)村に向けた
“基礎作り”は成功



村内外の関与者による主体的な取り組みで
「村の魅力」に改めて気づいた



本事業に対する評価を受けた後続事業の方向性



継続の鍵は
一人ひとりが改めて
「村の魅力」に気づくこと



村の魅力(=地域特性)の発見に資する
取り組みの展開を検討していく

都市圏学生交流推進事業で得た伸びしろと展開

「村民と都市圏学生との関係性が構築されたこと」自体が大きな成果と言える。さらに、一時滞在やオンライン・リモートでの関わりも村の活性化に効果があり、村民1人ひとりが村の「良さ」に気づけることもわかってきた。

これらの関係構築を、更に広く拡張していき「音威子府村だからこそできる取り組み」を模索していくことが望まれる。

事業の継続と改善点

- 人の循環
 - 村民として長く住む人々と、新たに参加する人々のバランスを取ることが重要。村外からの新しい参加者が地域へ新たな刺激をもたらす
- イベントの活用
 - 新たなイベント(夜市、ショーイベント、謎解きイベントなど)を通じて、コミュニティの活性化と外部からの参加を促すなど、村民の「顔」が見えるような取り組みを継続していくことを検討する

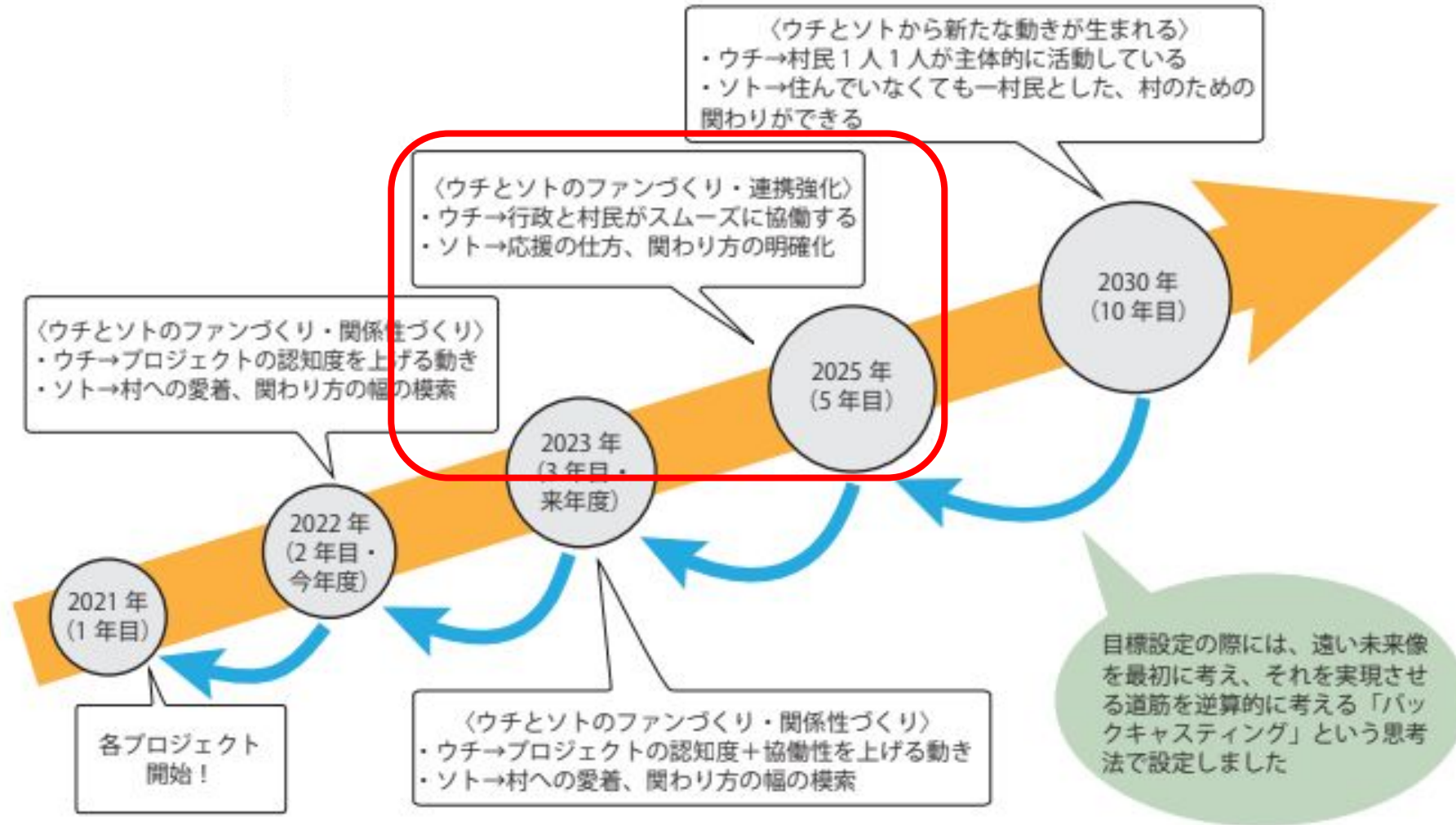
次への展開

- 村民の意識醸成に向けた取り組み強化
 - 事業を通じて、村民自身が村の将来に対する意識を高める取り組みを強化する
 - 外部との交流
 - 村外の人々との継続的な交流を促すことで、新たな発見や村への愛着を育てる
 - オンライン交流の拡充
 - 村に来なくても参加できるオンラインプログラムを増やし、子どもたちの教育や娯楽の選択肢を広げる

第1期 外部人材伴走型インターンプログラム 振り返り

2025年度は”発展の年”

2025年度は、前事業スタート時に設定した中長期目標の中でも、特に『ウチ』と『ソト』の連携強化を目指す”発展の年”の位置づけ



本プログラムの背景と目的

前事業の課題を踏まえ、外部人材伴走型のインターンを考案、具体的な「行動」を通じた地域活性化を目指した。行政に加えてメンターやアドバイザーがインターン生の成長を最大限支援しつつ、地域の段階的な活性化と、村民一人ひとりの活躍の場を見つけることも共通テーマとして設定した。

内外連携による地域発展

長期的な視点

● 当初の目標

- 村民が村の将来を「自分事」として考え行動
 - 地域活性化の原動力として、村民一人ひとりが主体的に関わる

● 発展した目標

- 「ウチ(村民)」と「ソト(外部)」による多様な関わり
 - 内外の視点を融合させた新たな地域づくりモデルを模索

● 目指す姿

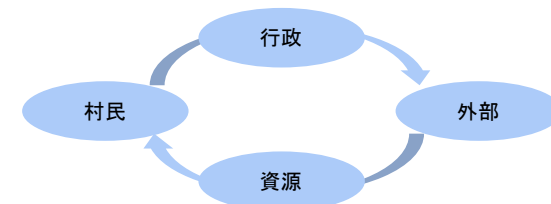
- 数十年後も活気ある(挑戦ができる)村の存続
 - 次世代へ音威子府村の「価値」を継承していく

外部人材との協働による 循環型の関係人口創出の試み

新たな試み

● ”循環”の試行

- 外部人材の伴走による事業実施



● 事業を通じた 多面的な継続性

- 外部人材の主体的・継続的な関与



全体テーマ：“ 村民一人ひとりの活躍の場を見つけよう！ ”

外部協働を意識したインターンは、他の自治体では委託会社が運営を請け負って進めているところが大半である一方、音威子府村では運営を外部委託せず、外部サポートを受けながら職員が試行錯誤しながら全て進めている点が大きな特徴となっている。

村の課題解決だけでなく、村民の潜在的な可能性に焦点を当てた独自のアプローチを重視

20代-90代まで、
今までにも増して幅広い世代との交流が実現

活動の指針

● 村民の暮らしを中心に据える

- 村民の暮らしと地域への思いを常に意識した活動設計

● 強みの発掘

- 「村民の強み＝村の強み」を見つけ出すための取り組み

● 威力の共有

- 村の良さを多くの方に感じてもらうための情報発信

活動の広がり

芸能振興

公共交通

空き店舗活用

木工芸

コミュニティ形成



村内
ワークショップなどを実施



対外
成果発表会を実施



本プログラムの特徴

今回のインターンは継続的な関係人口創出も意識し、過去に村に関わった大学生を「メンター」として、また専門的知見を持つ人材を「アドバイザー」として迎え、インターン生の活動を多角的にサポートする体制を構築したことが特徴。特に、過去にインターンに携わってくれた学生が ボランティア精神でメンターとして関与してくれている状態は他にはない要素」で、このプログラムの大きな強みとなっている。メンターが村への愛着や地域貢献への意欲から自発的に参加することで、形式的ではない本質的で実践的なサポートが実現、インターン生との信頼関係構築にも多大な貢献となった。

単なる指導者ではなくインターン生と村民を繋ぐ
重要な”橋渡し役”として機能

メンターとインターン生双方の成長を支援しながら、
プログラムの深化を促進



メンターの役割

- 経験者としての視点
 - 過去に村に関わった経験のある学生
- 主体的な関与
 - 自ら積極的に関与する主体性
- 関係性の活用
 - 村民との既存の関係性を活用
- インターン生の活動に必要な事前情報の提供
- まちづくりにおける基本的な考え方のレクチャー
- 住民との対話に必要な視点や知識の提供
- 現地サポートも含めたインターン生への伴走



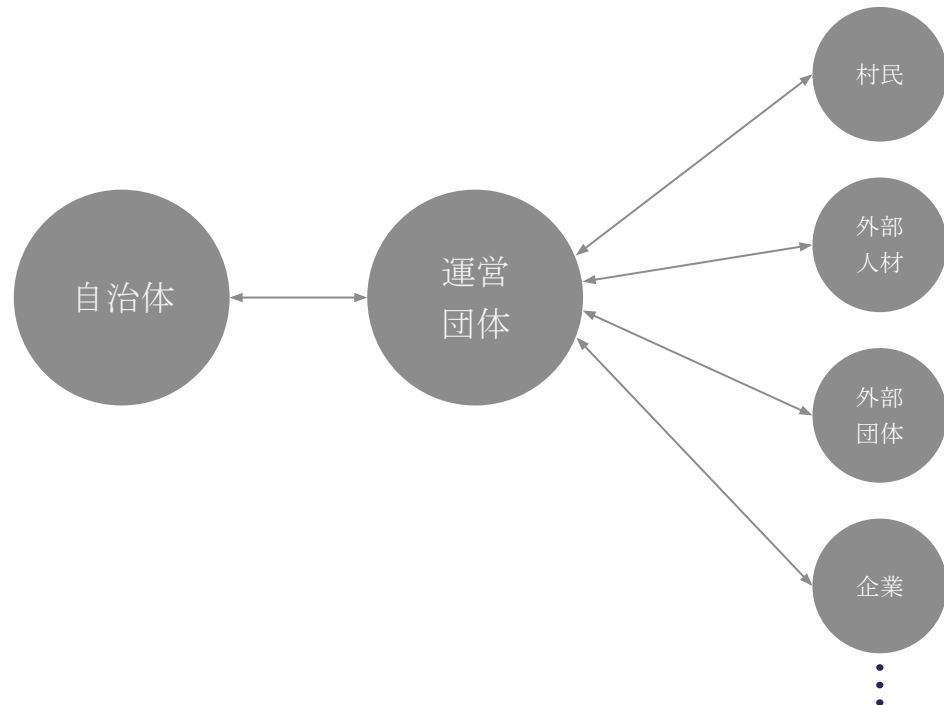
アドバイザーの役割

- 専門的なサポート
 - 人材育成・プロジェクト推進の専門的な知見提供
- 体制構築
 - 新たな体制の検討と改善プロセスの促進
- 全体最適化
 - プログラム全体の方向性と質の担保
- 村の実情を理解した上での、事業推進に対する俯瞰的・客観的な業務伴走
- インターン生の活動をともに行う役場職員やメンターの現況を客観的に捉えて、課題の洗い出しと実践のためのサポート

本プログラムの特徴

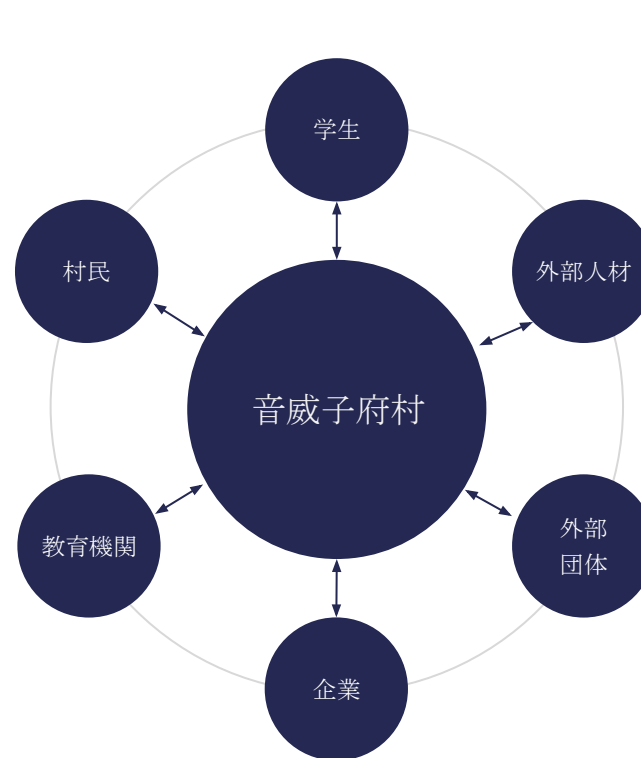
外部協働を意識したインターンは、他の自治体では委託会社が運営を請け負って進めているところが大半である一方、音威子府村では運営を外部委託せず、外部サポートを受けながら職員が試行錯誤しながら全て進めている点が大きな特徴となっている。

一般的な自治体インターンの仕組み



参考事例：北海道での類似取り組み事例／[道志村ローカルキャリア](#)

音威子府村での取り組みの特徴



職員主導の価値

職員が直接関わることで、地域の実情を深く理解したプログラム設計が可能となり、継続的な改善と地域に根ざした活動を実現



試行錯誤のプロセス

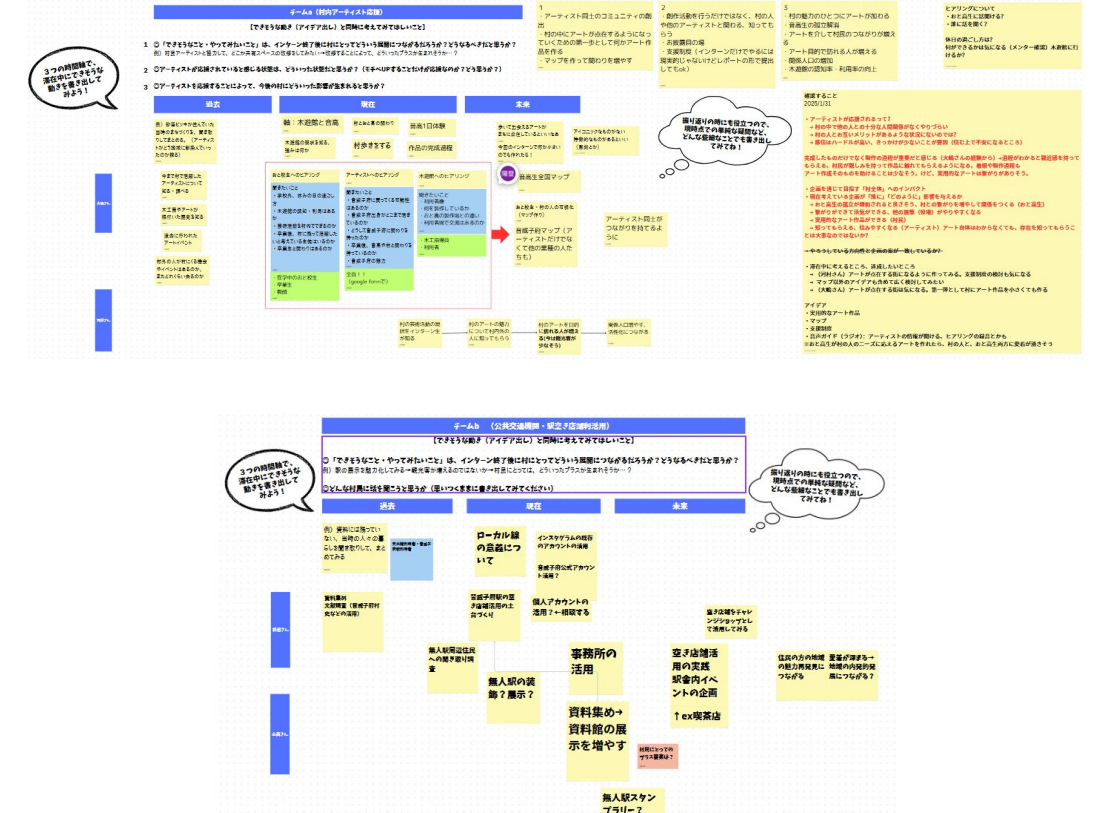
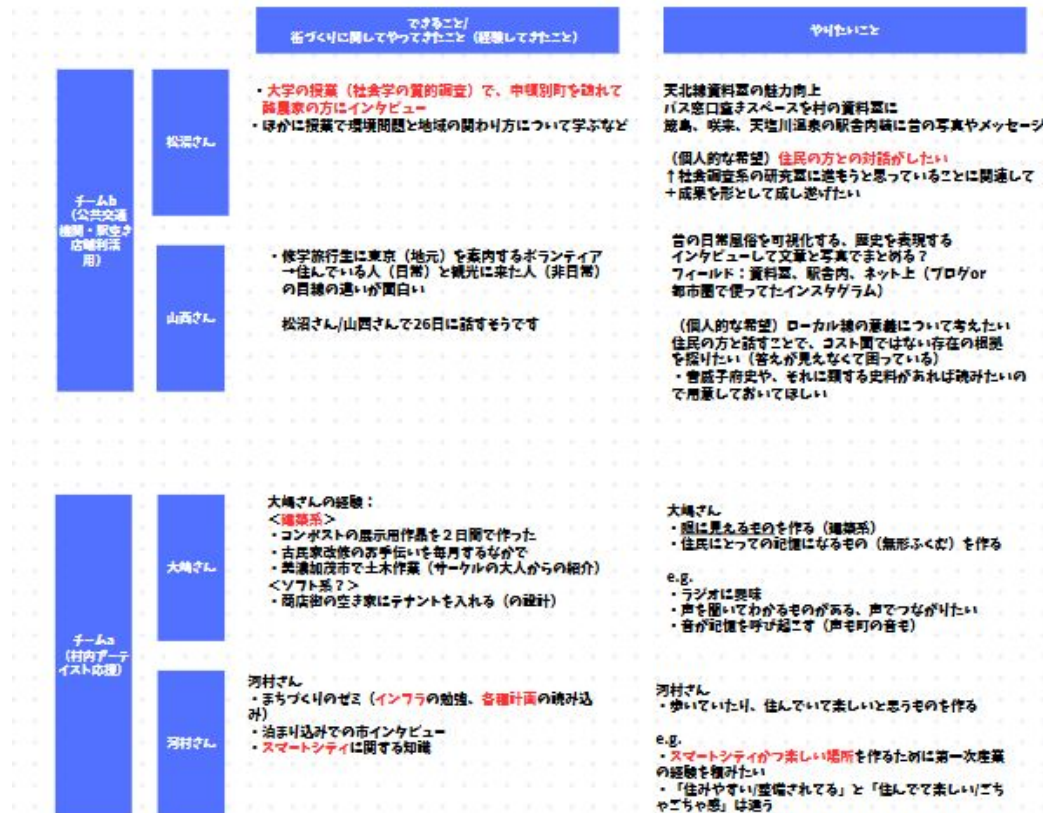
外部サポートを活用しながらも、職員自身が運営の全プロセスに関わることで、組織としてのノウハウ蓄積と持続可能な運営体制を構築

新たな取り組み: 非同期(オンライン)での事前情報共有

デザインツールの”Canva”を情報共有ツールとして活用した事前の情報共有(村の実情など)や、インターンで実現したいこと、その実現に向けて自分ができること、その具体的な行動への落とし込みを通して、村での実働に向けたディスカッションのベースづくりを試行した

「インターンで実現したいこと」、
「その実現に向けて自分ができること」の可視化

実現したいこと×自分ができることから考える
具体的な行動への落とし込み



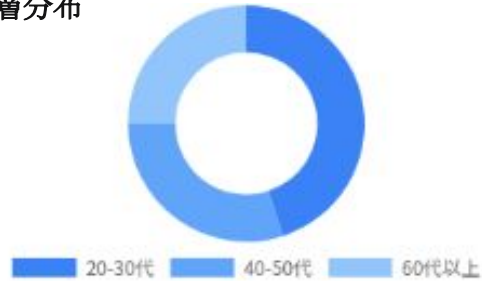
各チームの活動プログラム

プログラムの実働では2チームに分かれ、それぞれ「村内アーティスト応援」「公共交通機関・駅内空き店舗利活用」をテーマに活動した。

チームA: 村内アーティスト応援



交流年齢層分布



主な活動内容

- 芸術に関する地域の取り組みの情報収集
- ビッキ氏移住関係者へのインタビュー
- 木遊館でのワークショップ企画・実施

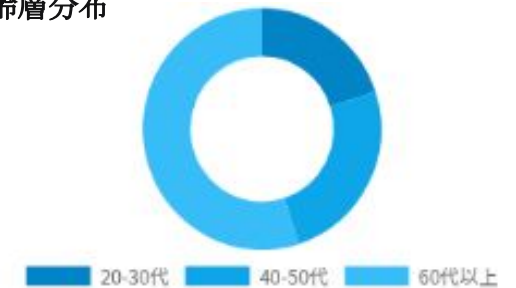
特徴的な交流

- お宅訪問での手料理と深い対話
- 村民と学校職員の交流
- 木遊館スタッフとの日常的な協働作業

チームB: 公共交通機関・駅内空き店舗利活用



交流年齢層分布



主な活動内容

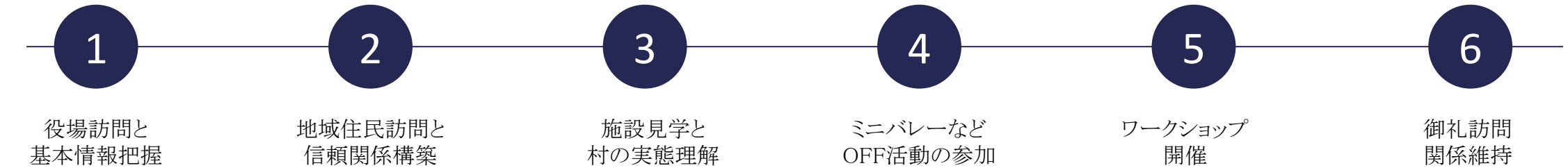
- 観光施設・行政部署へのインタビュー
- 元国鉄職員からの歴史聞き取り

特徴的な交流

- 90代元議員宅での2時間にわたる対話
- 人脈の連鎖(元村長→簗島さん→竹森夫婦)
- カフェ・ゲストハウススタッフとの継続的な関係構築

交流活動のタイムライン

活動の経過とともに村民との関係が深まり、自然な交流へと発展していった点が特徴的。「目的のある交流」と「偶発的な交流」のバランスが信頼関係構築の鍵。



情報収集期

- 公式チャンネルでの接触
 - 役場職員や施設スタッフとの初期コミュニケーション
- 村の構造や主要課題の把握が中心

関係構築期

- 共同活動での交流
 - スポーツやイベントを通じた自然な関係形成
- 公式/非公式の場での自然な交流が増加

関係深化期

- 家庭的な親密さ
 - お宅訪問・手料理での深い対話と継続的な関わり
- インターン後も継続できる関係の確立

インターンを通じた成果と変化: 関与者の声

デザインツールの”Canva”を情報共有ツールとして活用した事前の情報共有(村の実情など)や、インターンで実現したいこと、その実現に向けて自分ができること、その具体的な行動への落とし込みを通して、村での実働に向けたディスカッションのベースづくりを試行した

音威子府村ならではの関係構築

「顔の見える関係」の創出

● 音威子府村ならではの直接対話

- インターネットやSNSではなく、対面での会話を中心とした関係構築

● 複数回の交流による信頼関係の深化

- 一度きりの接触ではなく、重ねて訪問することで生まれる親密さ

「メインの活動ではない時(雑談・OFF)」の重要性

”人としての価値観”への気づき

● 食事を共にする時間

- 手料理やお菓子を囲むことで生まれる安心感と親近感

● 雑談から生まれる信頼

- 本題とは関係のない話題を通じた人間関係の構築

● 肩書を外した交流

- 「一人の人間として向き合う」率直な関係性

人脈ネットワーク形成の特徴的ポイント

単発ではなく複数回の訪問

形式でなく本質的な関わり

次の関係へと広がる構造

継続性

×

真正性

×

開放性

各視点からの成果：インターン生

インターン生から見た今回のインターンは、「村の新たな価値の発見と地域資源への再評価」につながっている

村に対する見方の変化

何もない村



可能性がある村

不足



豊かさ

「以前は『何もない』という印象でしたが、滞在を通して地域を盛り上げようとしている人がいると感じた」

「『何もない』ことこそが、安らぎになるという発見もあった」

村の魅力の再発見

人々の温かさ

アートの温かさ

静けさの価値

「村の人々の魅力や、ビッキ(トーテムポール)の存在の大きさを感じた」

「アートとおと高生の存在、コミュニティの狭さと開放性の両立を魅力に感じた」

各視点からの成果：メンター

メンター経験による自己効力感の向上と地域への貢献意欲の高まりが、持続可能な村への関与モデルの基盤となっている

自身の成長と村への新たな関与の形

メンターとしての視点を獲得

- 学生の視点からインターンの設計に携わる経験
- 地域おこしにおけるコミュニケーションの重要性を再確認

「インターン生とともに成長できる機会となり、支援する側の視点を学ぶことができました」

新たなポジションの創出

- 「より深い関わりやステップアップした関与」
- オンラインと対面サポートの違いへの気づき

「地域とのより深い関係構築の機会を得られたことで、自分自身の役割について考えるきっかけになりました」

村との関係性の進化と今後の期待

地域との関係の深化

- 「メンターとして携わることで再訪の良い機会に」
- 過去に関わった村民との交流深化

「以前の関係性があることで、村民の方々も気さくに話しかけてくださり、インターン活動がスムーズに進みました」

期待と展望

- 定期的な訪問・支援の意向
- 後進の育成や支援の意向

「継続的な関わりを通じて、村の変化を見守りたい」
「これまでに構築した関係性を基盤として、村の課題解決に貢献するアイデアを積極的に提案していきたい」

各視点からの成果: 役場職員を含む村民

村民と役場職員がともに学び、村の新たな価値を認識することで、協働型の村づくりへの基盤が形成されている。また、村民自身も地域資源の可能性に気づく機会となっている。

村民の変化

● 地域資源の再認識

- 外部の視点による村の資源や強みの再発見

● 価値観の転換

- 「何もない」を情報過多な都会との対比で「それこそが魅力」と捉える視点の獲得

● 外部とのつながり

- 継続的な関係構築による安心感 と村の応援者獲得

「若い人・外部の視点から村の魅力を見直すことで、自分たちが当たり前と思っていた村の価値に気づかされた。
これからも外部との交流を続けていきたい」

新たな気づき

● 新たな人間関係の構築

- 「これまで関わりの薄かった村民 との関係構築」

● 目的設定の重要性

- 「事業の目的やターゲット設定の重要性」

● サポート体制の価値

- 外部人材への相談体制の心強さ

「インターンシップを通して、一部の村民と役場職員との距離が縮まったと感じている。外部の若い力と継続的に関わることで、新たな視点や活力が徐々に生まれていると感じる」

本インターンプログラムの多面的な成果

多様な主体が互いに影響し合い、関係者の各々が成長する協働型の地域づくりモデルが、本インターンの多角的な成果と言える

地域づくりへの主体的参画マインド形成



インターン生

- 村の魅力(アート、人間関係、「何ものさ」の価値)の発見
- 多様な世代との交流
- 企画立案・実施の実践経験

実践的な地域コーディネート力の獲得



メンター・アドバイザー

- 新たな関与ポジションの獲得
- サポート力・ファシリテーション能力向上
- 村民との継続的な関係の深化

内発的な地域活性化意欲の高まり



村民・職員

- 地域資源の価値の再認識
- 地域内の新たな人間関係の構築
- 外部視点による「当たり前」の再評価

単なる接触から深いかかわりへ
(量的拡大だけでなく質的深化)



紹介の連鎖による関係の広がり
(点から線、線から面へと発展)



「顔の見える関係」の価値
(継続的な信頼関係の構築)

昨年度との違いと成果

今年度は、過去に村に関わった経験のある大学生らを「メンター」と「アドバイザー」として設置し、継続的な関係人口創出/循環を試みた。また、インターン生が安心して現地入りできるよう事前事後を通してオンラインでの情報共有も試行し、一定の成果を得た

オンラインでの情報共有

- 開始前から来村に向けて、Canvaを使用した情報整理や共有を実施
- noteなどを通じた実際の活動記録の蓄積や発信の土台作り

メンターの貢献と成長

- 行き詰った時の問題点の言語化をはじめとするインターン生の壁打ち相手を担い、モチベーションの維持に貢献
- メンター自身も、学生の視点からインターンの設計に携わる経験や、モチベーターとしての役割の認識、オンラインと対面サポートの違いへの気づきなどを得られた

アドバイザーの関与

- 言葉の定義付けの重要性、アンケート収集方法などの学びの提供
- アドバイザー自身も、外部人材の伴走型インターンの有効性や、俯瞰的な視点でのアプローチの重要性を認識。リモート支援の限界や現地情報の重要性を実感



インターン生個人の成長はもちろん、
メンターとアドバイザーも気づきを得ながら、村全体に新しい風を吹き込んでいる

今後の課題と方向性

オンラインとオフラインの連携

- 事前・事後のオンラインコミュニケーション強化
- 現地滞在の効果を最大化する準備・振り返り
 - 「オンラインと対面サポートの違いへの気づき」や「リモート支援の限界と現地情報の重要性」の指摘から、両者のバランスを考慮した連携強化が必要と考えられる
 - インターン前後の期間に定期的なオンラインミーティングを設定し、事前準備と事後フォローをより充実させる など

継続的な関係構築

- 単発イベントではなく、長期的な関与の動機付けとなる仕組みづくり
- 小さな成功体験を積み重ねられるプログラム設計
 - 多くのインターン生が「今後も村と関わりたい」という意向を示しており、その意欲を実際の継続的な関係に転換する仕組みが必要と考えられる
 - インターン終了後も参加できる季節ごとのイベントやプロジェクトを企画し、定期的に村に戻る機会を提供する など

メンター・アドバイザー制度の改善

- 支援体制の明確化と持続可能なモデルの構築
- 役割の明確化とガイドラインの整備
- リモート支援体制の改善
 - 「メンターの現地サポートの強化や継続的な訪問の必要性」の指摘や、「インターン生に合った役割を果たすことの大切さ」から、制度の改善ポイントが明確になっている
 - メンターとアドバイザー向けのガイドラインを作成し、期待される役割と支援方法を明確にするとともに、定期的な振り返りミーティングを設定する など

村民の主体性醸成

- 外部支援から村民主導へと移行する持続的な仕組みづくり
- 村民協働のワークショップ定期開催
- 村民主導のプロセス構築
 - 事業の根本目的が「村民一人ひとりが村の将来を『自分事』として考え、行動を起こす契機とすること」であり、村民からも「地域資源の活用について考える機会がないだけ」という声があることから、主体性を引き出す工夫が必要と考えられる
 - 村民も協働でファシリテーターとなるワークショップを定期的に行い、地域課題の発見から解決までのプロセスを村民主導で進める機会を創出する など

「『ウチ』と『ソト』の協働」という音威子府村の独自モデルを確立し、
他地域へも発信できる取り組みへ昇華させる

終わりに

音威子府村インターンシッププログラムは

単なる「外部人材の受け入れ」を超えた

協働型の地域づくりの場

「村民一人ひとりが村の将来を『自分事』として
考える」という一歩を踏み出し、

自律的な村づくりの種を蒔く基盤となる

ことを目的に今後も継続していく

